

# 瑞岩寺報

2012.08.01  
(平成24年 葉月)

## 【お盆号】

### お盆総合案内

#### お盆法要

今年のお盆法要は左記の通り行なわれます。

昨年とは時間が異なります。ご注意ください。

【期日】8月4日(土)

【時間】午後1時～

【お盆の供養料】

◎先祖供養塔婆 5,000円

◎新盆供養塔婆 10,000円

【内容】檀信徒すべての精霊のお盆法要をします。

◎新盆塔婆供養

◎先祖塔婆供養

◎『般若心経』

◎御詠歌

法要後、お塔婆をお持ち帰りください。

粗品がございますので出欠席のハガキを返信ください。

#### お盆棚経参り

【期日】8月5日(日)～8月13日(月)

昨年より始めました各家へのお盆のお参りはお盆法要終了後から開始しま

す。副住職が早朝から夜まで約320軒の檀家さんを回りお棚経をあげます。どうしても都合の悪い場合は都合のよい日を返信ください。短い時間ですが、ご家族と一緒に参りをお願い申し上げます。

お盆参り予定日程 ※多少変更される場合もあります	
7月13日(金)～17日(火)	東京・神奈川・埼玉南部
8月5日(日)	太田市外(群馬県外・前橋・館林地区)
8月6日(月)	太田市外(足利・桐生地区)
8月7日(火)	太田市内(太田地区)
8月8日(水)	菟原地区、その他
8月9日(木)	七日市、落内、唐沢地区
8月10日(金)	丸山、清水、反丸地区
8月11日(土)	矢田堀地区
8月12日(日)	矢田堀地区
8月13日(月)	(予備日)

【時間】〈早朝〉6:00～9:00 / 〈午前〉9:00～12:00 / 〈午後〉12:00～15:00 / 〈夕方〉15:00～18:00

#### お墓そうじ

瑞岩寺にお墓のある方へのご案内です

【日時】7月29日(日) 午前6時頃から

お盆が近づいてきました。お墓のお掃除をしましょう。お盆前の一斉お墓掃除を右記のごとく行ないます。たまには早起きしてお墓掃除も気持ちいいものです。お子さんやお孫さんといっしょにどうぞ。

◆強制ではありません。この日この時間でないといけないということではありません。◆自分のお墓の掃除が終わったら通路など共有の場所のお掃除も積極的にお願いします。◆遠方の方はお寺でやっておきますのでご安心を。◆飲み物の用意、あります。

#### Attention!!

以下の点に留意ください。

#### 【お盆法要について】

◎お盆供養塔婆について、「必要」・「不要」を返信ハガキに記入してください。

◎「必要」の場合はお盆法要に「出席」・「欠席」を返信ハガキに記入してください。

◎「必要」で「欠席」の場合は、必ず8月4日以降に塔婆を受け取りに出てください。

塔婆供養料の振込みを同封します。毛里田地域の方は世話人さんにお渡しください。

塔婆を受けられる方は風呂敷などを、ご持参ください。

#### 【市内・県内外の檀信徒の方に】

市内・県内外の方は同封の振込用紙

をお使いください。

県外の方でお塔婆をお供えできない方は瑞岩寺でお墓にお供えいたします。ご一報ください。

#### 【お盆参りについて】

◎お盆参りについて「必要」・「不要」をハガキに記入してください。

◎「必要」と記入されたお宅には、8月初めにお参りします。

◎「不要」ならば「返信なし」の場合はお参りには伺いません。

「必要」だけ日時が合わない場合は、希望日をお書きください。調整いたします。

返信期日までに必ずお送りください。その結果により順番を決めお参りします。

返信葉書は7月31日必着です。

#### 【永代供養墓・水子供養墓関係者の方へ】

永代供養墓または水子供養墓にお入りになっている方については、瑞岩寺で責任をもってお盆の供養をしておりますが、個別でのお塔婆を希望される方はお申込みください。供養料は前項にある通りです。

#### 【ペット供養墓関係者の方へ】

ペットの合同供養は左記の通り行なわれます。

【日時】8月4日(土) 午前10時より

【お盆のペット塔婆供養料】4,000円

◆強制ではありませんので、ご供養し







ていたのは本当に分かりやすいもので、故人を五言絶句、七言絶句で表したらまさにそうなる、というものだった。

研修会に参加した若手のお坊さんたちは「引導が命」と言う。しかし本当に「命がけ」の引導を渡せるのか？是非、彼らがどんな引導を渡すのか聞かせて欲しいものだ、と申し上げておいた。

今日もお葬式があった。25年前に奥さんを見送って85歳で亡くなった方のお葬式。いいお葬式だった。2週間ほど前は、44歳の女性Oさんが亡くなった。子どもさんがいないが、とても仲のいいご夫婦だった。2年前にOさんがスキルス性の胃がんだということがわかり、手術。そして抗がん剤治療と続いた。小康状態を保っていたのだが、去年の11月、再

経費を安くできるかということ。だれもが「葬儀は高い」と思い込んでいる。葬儀社の価格はパッケージになっている場合が多いから、不要なものについて「いらぬ」となかなか言えないし、要・不要がわからない場合もある。それが葬儀費用を高騰させている。しかし、『あなたが旅立つ日のために』には、葬儀費用を半減するコツまで書かれている。また、神宮寺報『唯々諾々』には、葬儀社と神宮寺で行った葬儀費用の比較表まで掲載されている。寺を使えば、葬儀社を使う場合の1/2から1/3で葬儀ができることを、神宮寺の檀家さんたちは周知しているのだ。しかし、このような情報を寺が出すことはあまりないが、出す必要性はあるし、出したとき、葬儀は明らかに変わる。

現在の、そしてこれからの葬儀ビジネスのターゲットは団塊世代70万人。あと30年+aで70万人が確実に死んでいく。それを見越して、葬儀ビジネスが大量化・多様化している。たとえば、流通大手であるイオンがいい例。次はコンビニまでが参戦するという。イオンの場合は、イオンのカード会員1700万人がターゲットになっている。その人たちは葬儀を買う消費者Ⅱ「コンシューマー」。棚の上に乗っかけている「葬儀」という商品を買うわけだ。もちろん商品だから、さまざまランクがある。イオンの場合は、AランクからFランクまで7段階あり、一番安価なランクは19万8000円。最高はおよそ150万円。それを自由に選べるし、それは分かりやすい。

ところが、寺の場合、檀信徒には葬儀を買うという概念はまったくなく、寺を護持する檀家が寺に葬儀を執行してもらい、そのためのすべての手続きや準備を葬儀社に依頼するというものだ。檀家とは言ってみれば寺の「スポンサー」。もともと消費者感覚もなければ、寺からのサービスに期待する人々でもない。かつては深い信仰で結ばれた関係ではあったが、現在は寺から依頼される護持運営のための寄付金を、文句をいながら出すスポンサー。このコンシューマーとスポンサーの葬儀に対する感覚の違いは大きい。

昨年、イオンの葬祭担当のトップと京都で対談した。そのとき神宮寺で行っている葬儀の費用とイオンとの料金対照表を見てもらった。イオン19万8000円と同じものを神宮寺では5万8000円でできてしまう。もちろん同レベルで、だ。イオンのトップはそれを見て、「お寺がこのように動き始めたなら、ぼくらは退散するしかないですね」と。

ではお寺はなんでそうしないのか？ということも考えておいた方がいいと思う。

（副）「やはり、手間がかかって大変だからでしょうか？」

（高橋）やはり、面倒なんだろう。そして、もうひとつ、新しい試みをする周囲のお寺にいろいろ言われるということもあるかな。

あまりにも宗派を意識したお坊さんが多い。そしてそれが「ムラ」を構成

する。「原子カムラ」と同じ「ムラ」。つまり仲間意識が強く、つまなければ生きていけない人たちの集団。その中で評価しか通用しない世界。それは何か新しいことに挑戦しようとする人たちに集団でプレッシャーをかけるか、あるいは「シカト」無視する。いま、仏教宗派は、そのような状況にある。それは決して社会にいい影響は与えない。

仏教宗派に関して言えば、押さえておかねばならないことがある。それは宗派を構成する宗教法人は、大きく括れば公益法人の範疇に入るとのこと。つまり、教団や寺は、一種の公益性をもった宗教法人として成り立っているということだ。宗教法人の公益性とは、宗教が精神的な支柱として、あまねく人々の心の糧となる機能を持っていることを言う。現在、その意識が欠如していると思わざるを得ない。宗教法人が宗教関連（信施）収入に対して非課税という優遇を受けているのは、公益的な仕事をしている、という認識からだ。宗教が多くの人々に、精神的・倫理的・宗教的なメリットを与えることと、課税を相殺しているのだ。

ところが、一般の寺は檀家システムの中にあり、寺が宗教的メリットを与える対象は、檀家に限られるのが普通。それは組合組織と同じことで、檀家さんがいわば組合員。こういうのを「公益」ではなくて、「共益」と言い、檀家しか利益を得られない組織になっている。

税制優遇をうけている団体が、公益性を担保できなくなったということ

は、深刻に考えなくてはいけないことだと思う。そういう意味を含めて、「宗教法人」設立の意味とか、定款としての寺院規則の再構築などをもう一度洗い直さねばならない。

公益法人の責務として外してはならないものに情報公開がある。情報公開とは、寺の事業報告、決算報告を正確に行い、事業計画、予算計画をきちっと出すというもの。それは一般の会社や組織ではごく普通のことなのだが、不思議なことに宗教法人はそれが正確に履行されなくてもおとがめがない。そのように、寺の足下が明らかになっ

ていない状態で、檀家さんに法話をしても、それが檀家さんたちの心に届くはずはない。その部分さえ分かっているれば、寺はきちんと運営されていく。ほとんどの場合はそれを『僧伽（サンガ）』という神宮寺の季刊誌で檀家さんにしつこくくりに語ってきた。そしてそれが大きな情報公開の基盤となった。寺とはこういうことをする場所である。住職であるぼくは、こういう意思を持って寺を運営し、公益的な仕事をしていくのだということが、季刊誌上でしつこいほど繰り返された。足元を見せ、いい情報も悪い情報も公開した。そうなったとき、明らかに信頼度は増し、同時に檀信徒からの寺へのアクセスがものすごく大きくなった。

ひとつの例としてあげれば、法要の際の檀信徒の参加が増え続けていることだ。昨年のお盆法要は、同じ法要を4回行った。今年は5回になる。なぜなら、5回やらないと入りきらないほどの檀信徒が寺につめかけるから。1

回につき200人を超え、250人あるいは300人を超える場合もある。したがってお盆法要の総参加者は千人を超える。神宮寺は檀家700軒弱の寺。そのような規模で法要に千人あつまるというのも考えられない。しかも若い人が圧倒的に多い。お盆法要だけでなく、春に行われる「お花祭り法要」でも同じ現象が起きている。しかも参加者は、イヤイヤではなくて、毎回楽しみに来ている。理由は法要が面白いから。意外性があるから。しかも法要に出会うと何が得られるから。ただ、お経だけを聞かされているわけじゃない。

神宮寺の場合は、この部内（地域内の関連寺院）が7ヶ寺。その中でお盆のお施餓鬼法要をやっているのは5ヶ寺。毎年、各寺の住職は各寺院の施餓鬼法要に出仕する。1ヶ寺1ヶ寺、全部回り、それでお互い「行って来い」になるわけ。しかし神宮寺の場合は4回〜5回もの法要だから頼めない。したがってぼく一人でやらねばならなくなつたというわけ。どうしようかと思ひ悩みながらも、毎年テーマを決め、そのテーマに合ったゲストを迎え、いっしょに法要を行うという方法を考えて。たとえば、モンゴルから8人のチベットを招聘し、チベット語の声明と日本のお経のジョイント。韓国舞踊とパークッション集団「サムルノリ」とお経のコラボ。日本舞踊・花柳流の若手とお経の共演。女優・渡辺美佐子さんが語る「くもの糸」を中心にした語りとお経。歌手の小室等さんの歌声とお経の掛け合い。フラメンコダンサーのオリハさん、コンテンポラリーダンサーのタクジさんとお経の合体などな

ど。そして今年は津軽三味線の高橋竹山さんとの施餓鬼法要が準備されている。毎年変わる法要の内容。しかもこの法要のためだけに制作された出しものが流れているという仕掛け。そういうところが創りあげる方としても面白くてたまらない。同時にその内容が洗練されていて、精度が高ければいいことはない。檀家さんたちが夢中になるのも無理はない。

このように、檀信徒が寺に集まる機会が増えてきたとき、寺と檀家の間の理解が深まり、さまざまな問題が解決・解消していくことにもなる。

たとえば、「神宮寺は後継者が大変」と、ずっと言われ続けてきた。男の子が2人いるが、2人とも寺を出て社会人になっていて後は継がないし、このようにいろんなことをやってきた住職の後には、さぞかし大変だろうとい



うおせっかいな声だ。じつは、ぼくが住職になったとき、2つのことを目標として掲げた。そのひとつが「世襲は断つ」。もうひとつは「檀家システムを根本から考え直す」だった。寺の世界で、世襲はいま普通になっている。世襲率は歌舞伎役者に次ぐもので、国会議員のそれをはるかに超えている。そしてその弊害が随所にあらわれている。「家業化」。お寺が家業になるということ。その場合、仏教という「発心」や「慈悲心」をベースにすることより、運営や利益・利権が優先される場合が多い。それは仏教の教えを教化するための大きな障害になる。だから世襲は断つと決め、子どもたちにも伝えたい。すると、今度は、後継者の問題が出てくることになる。目標を成就するためには、その覚悟は必要だった。そのため日本中を探し回った。神宮寺は、情報公開とそれに基づく信頼関係の構築がぼくの代でなされている。それを継承し、時代に合わせた展開ができる人材を探しに。

神宮寺は今まで寺の機能を最大限活かす方法を考え、実践してきた。そのためには多くの人々や、異分野の組織などとのかわりを持つことが必要だった。それが得意なものとして寺関係者には映り「大変だろう」と言われていたわけだ。しかし、そのように寺が動いたとき、檀信徒との間は深い関係性が築けるようになった。寺檀関係にトラブルは皆無。これ程、寺として楽なことはない。探しまくった末に見つけた神宮寺の後継者は、いま、修行中。次の世代が活躍できる基盤は、す

でにできあがつている。

何度も言うように、檀家さんと寺の間に、信頼関係ができていたというところが震災の核心だと思ふ。去年の3月の震災で、ぼくは発生直後に寺を飛び出した。その1週間後からお彼岸が始まったのだが、ぼくは檀家回りができず、いつも手伝いをお願いしているお坊さんをお願いした。彼が各家に伺うと、どこでも冒頭「住職はもう被災地に行っているんだらう」と聞いてきたという。住職が日頃何を考え、どう行動しているかが檀家さんにはよくわかっていて。それはとてもありがたいことであり、そこまでの努力が報われたことに喜びを感じる。お彼岸参りで住職がうかがわなくても文句は言わず、かえって支援金がいっぱい集まってしまう。そういう寺ってあまりない。

これらが30年間、計画を立て目標を作りながら、必死で動いてきた神宮寺の姿だと思ふ。

宗派や地域の寺に立脚するのではなく、檀家さんの側に立ち位置を持ち、常に寺の情報を正確に隠さず出していくこと。神宮寺が10年間100回と決めて行った「尋常浅間学校」のように、継続性を持った、質の高い文化行事。人々の悲しみや苦しみを、門を開け迎え入れる葬儀やグリーンケア。異分野とのつながりを模索し、とくに医療や科学との情報交換・学術的交流への志向。そのようなものが詰まっているお寺は、かならず次なる時代の要請に込めることができる。

1988年、神宮寺では建物の建設とか、晋山式などの大きな行事などの際に檀信徒へ依頼する「寄付金」を貰わないということを決めた。それ以降寄付の要請をしたことは1度もないが、結局その後3億円を超える事業をやっている。まず、葬儀や尋常浅間学校に使えるホールを建て、本堂横にあった土地を買い駐車場を造成した。ホールの建設費が2億円を超え、駐車場は1億3000万の費用がかかった。普通の寺なら、すぐに寄付帳が回る。檀家さんは、いろんな思いや文句を言いながらも、寄付をする(せざるを得ない)。はたしてその寄付の対象事業が、檀信徒のためのものあるか否かは関係なく、責任役員会や総代会、そして住職の意思により、事業は決められ実施され、そのための寄付が行われる。

寄付行為に本来「信施」である。つまり檀信徒の信仰が基になり、その証として「喜捨」とするというのが寺への寄付だ。しかしこれがいま、強制的に行われる場合が目立つ。しかも必要な事業か否かの精査もなく。神宮寺はその点をクリアにしようと思った。そして寄付をやめ、自力でお金を生み出す方法を考えようと思った。そのためには資金的・人的に綿密な将来への計画作りが必要となった。10年を1スパンとし、多くの在職期間を3期とする。その中で、檀信徒に強制的な寄付をもらわない方法は何かを考えた。資金に関する計画、これを一般企業では「資金繰り」という。そして寄付に頼れない企業は、大変な苦労をしながら借入や返済を行っているの

だ。一方、寺は、「寄付金」という科目を立てれば、苦勞することなくお金を集められる。ほくはその安易さから離れたかった。そして1988年から全檀家に出している決算書(宗教法人神宮寺のすべての経理)を銀行に見てもらいながら、銀行からの借り入れを考え始めた。

しかし、当時、まったく資金のなかった神宮寺はお金が借りられない。そこで一つのアイデアを打ち出した。何かを造るための寄付ではなく、長期にわたって神宮寺を護持するための基金造成『護持基金』を檀信徒に提案したのだ。『護持基金』というのは、1軒1万円を拠出していただきで10年間継続する。目標額は1億円。造成目的は、お寺に緊急事態があったときのための使用と、長期的な基金として、目の先の事業で取り崩すことなく、基本的

に果実運用を目指すものとした。提案したのは、ちょうど阪神淡路大震災が発生した翌年のことだった。つまりそのような地域全体を巻き込んだ災害で、もしも寺が全壊したら、とても寄付など頼めない。だから、自力更生の備えにしておこう、というものでもあった。檀信徒全員の賛同を得て、基金は順調に積み上がった。その基金は取り崩すことはなかったが、駐車場の買入れなどで、銀行への一定期間の預金担保として有効に使われた。

2億円を超えた銀行からの借り入れは、15年計画で返済が続けられ、あと2年で完済する。檀信徒への寄付金の負担を考えたとき、寄付を受けず、寺が独自で資金繰りを行い、その経過を檀信徒に公開する。このことは、寺に対する檀信徒の信頼が高まることになるとは実証済みだ。

将来的には、これからの収益を護持基金に投入し、基金額を増加させ、果実運用をする。そうなってくれば、檀信徒にいただいている葬儀の際の使用料は無料になる。もっと深化すれば葬儀料も全額無料化できるかもしれない。

寺とは、今までお話しした数々のものが複雑に入り組み、協調しあい、できあがっていくものなのである。

(副) いろいろ勉強になりました。是非、実践させていただきませう。ありがとうございます。

合掌 (終)

### お盆法要のゲスト

lata 一志新 (エスラジ)



〈プロフィール〉

中学生の頃、怪我でバスケットボールを続けられなくなったことがきっかけで、ギターを手取る。

その後、作詞作曲やバンド活動を経て、2000年よりリュック一つで海外を周り初める。

ある日、美しい夕焼けを前に「これは言葉では表現できないなあ。」と気づき、旋律楽器の魅力に惹かれる。

三年後、インドの弓楽器「エスラジ」に出逢いインドはベンガル地方のシャンティニケタン(平和の園)にて、ブッタデヴ・ダス氏に師事。

帰国後、様々な楽器とのセッションに留まらず、絵画やヨガ、お経などと共演する。

エスラジの魅力的かつ空間的な音により、表現の可能性を広げている。

すべての人に佛さまの智慧と慈悲を

宗教法人 慈眼山 瑞岩寺

群馬県太田市矢田堀町388

TEL:0276-37-1231 / FAX: 0276-37-1729

E-mail: info@zuiganji.com

Website: http://www.zuiganji.com

i-mode: http://www.zuiganji.com/i/

- ◇ 御意見、御要望はいつでもお知らせ下さい。
- ◇ お身体をお大切に、お健やかに暮らしてくださいませ。
- ◆ み仏さまの御加護を心からお祈りいたします。 合掌